

善光寺縁起について

嶋 口 儀 秋

善光寺縁起は今日数十種を数える事が出来る。これを各時代ごとに分類・分析し、又諸寺院の縁起と比較考察する事によつて、善光寺創草の歴史事実と信仰内容の一端を明らかに出来ると考える。そこで鎌倉時代までの善光寺縁起の成立発展、及び内容について考察を加えてみたい。

善光寺に関する最も古い記文は、『伊呂波字類抄』に、「善光寺、斯仏像、日本国度至、経歳積禪式百陸歳之中、京底流転五十歳、信濃国請降、経年員一百六十六歳云々」、とあるもので、すでに神護景雲二年に書れた記事と思われる。同書にはこれと別文で、推古十年四月八日信濃の国人若麻積東人が本国麻積村に如来を移し、更に四十一年後明日香原宮長老東人によつて水内郡に移されたとある。この記文は先の文章より年代は下るが、後の伊那元善光寺の伝承に引き継がれる事となる。さて神護景雲二年に書れた記文について古いのは、『扶桑略記』の三巻に或記に云くとして、欽明天皇十三年十月百濟の聖明王が献じた阿弥陀如来を、推古天皇十年秦巨勢大夫が信濃に移したという文である。ここで注目されるのは秦巨勢大夫の名が見える事で、善光寺の創立に帰化人の影響があつた事が窺える。略記には他に欽明天皇十三年、摂津難波の津に漂着した弥陀三尊を、仏の託宣で推古十年信濃に移した事、又この仏像は天竺の月

蓋長者が鑄造したものであるという「善光寺本縁起」を載せている。この本縁起は『覚禪抄』にも見え、当時一般に流布していたと思われるが、その全様は知られない。

さて善光寺縁起は鎌倉時代になつてほぼ完成した。嘉禎三年頃編述された『太子伝古今目録抄』の「吾朝逆臣焼失等塔事」の条には善光寺縁起を引用して、善光寺如来が三度法難にあつた事が記されている。又この時代に成立した『顕真得業口決抄』には、善光寺如来と聖徳太子の間で消息往返があつたと書かれており、この頃から太子信仰と善光寺如来の信仰が結合されたと考えられる。ついで最も注目されるのは、金沢文庫所蔵の正嘉年間了禪が書写した、『善光寺如来事并弥陀観音現益事』である。これは不完全ではあるが、善光寺如来と天竺国月蓋長者との因縁、百濟国への飛来、その後我國に伝わり、難波の津に投入された事を述べ、若麻積東人（善光）が信濃に移した事を記し、次に立像の事、光中の七仏薬師事、善光寺願小身給事の項目をあげ、最後に善光の嫡子善佐と皇極天皇が如来の力で地獄より蘇生した事が語られている。この縁起が次の応安三年から応永卅四年の回録までの間に成立した、「古縁起」又は「応永縁起」と呼ばれる、続群書類従所収の四巻本の基になつている。「応永縁起」の内容は、第一巻に明天竺百濟利益、第二巻は明日本王巨順逆利益、第三巻では明善光善佐因縁を記載しており、ここまでは金沢文庫本の内容を細述したものである。この応永縁起の特色は第四巻目で「惣明善光寺種々靈験」として十八項目にわたつて善光寺如来の靈験と歴史を記している事である。この縁起は多くの善光寺縁起中、最も整つたものでその後作られる縁起の大部分がこの体裁をとつている。この様に鎌倉中期以後善光寺縁起が完備され、

信仰の内容を濃厚にしているのは、源頼朝による善光寺再建後、善光寺信仰と太子信仰の結合、分身仏及び新善光寺の造立、或は善光寺における念仏信仰等が急速に発展した事と期を一にしている。これは庶民の間へ善光寺信仰を持つて遊行勧進する多くの善光寺聖が、その唱導の手本として盛んに縁起を使用した為である。

では次に「一応永縁起」を中心に善光寺縁起の内容について考察したい。まず善光寺縁起の主な特色は、第一に善光寺如来が我国最初の渡来仏であり、難波の津より信濃に移されたと伝えられている事。第二に東人又は善光と呼ばれる者が、自宅の白の上如来を安置し、その後村人朋友の助力によつて寺を作り、如来の白毫から点じた不断燈明を管理して、信仰の対称としたと述べている事、第三に善光寺如来を地獄からの救済太子と善光寺如来を結びつけて語っている事。第五に聖徳太子と善光寺如来を結ぶ語つて語っている事。第六に新善光寺及び分身仏の造寺造像を勧めている事の六点である。この内第一、二の点について説明を加えると、まず第一の我国最初の渡来仏とするのは、聖の唱導上善光寺如来の権威を高める為と思われるが、他面仏教公伝以前に民間へ仏教が伝わつていた事を推定させるものである。次の難波の津から如来が出現したという伝承は、仏教公伝の際における崇神派と敬仏派の争いに関連して語り出されたものであるが、この様な海中出現の伝えを持つ本尊は東大寺二月堂、浅草寺等にもある。これは我国の古代常民に海中（海上）を他界とする觀念があつた為で、海の彼方から依り来る靈魂即ち祖先靈を、仏教化して信仰したものと思われる。更にこの難波から善光寺始来が信濃に下つたという伝承は、天照大神の近畿・伊勢への巡行、或は『常陸風土記』に伝える素戔嗚尊の衆神を歴訪した

という神話に見られる、神々が子孫の間を遊幸するという祖靈遊行來訪の觀念が善光寺如来に投影されたもので、その結果縁起に記す伊那麻績をはじめ各地に善光寺如来が立寄つたと伝える場所が存在するのである。こうした善光寺如来を祖靈と同一觀念で信仰した事は、第二の特色からも窺える。それは東人又は善光が私宅の白の上に安置したという記文で、後世多く作られた分身仏の特長ともなつている白座は、先祖祭の祭壇として用いられる物で、現在も民間の正月行事には多く見られる。又善光寺如来の白毫から点じたという不断燈明と同様のものは、高野山奥院、叡山延暦寺、東大寺二月堂、浅草寺等各地の靈場に存在する。これは祖靈のシンボルであり、同時に祖靈を祀る聖火であつた。従つて善光寺の禰祥は、この地を祖靈の集まる聖地とする氏族の先祖を祀る祭場から発展したと思われる。

所で善光寺の創立者と伝える若麻績東人（本田善光）は、我国の庶民信仰史上無視出来ない聖としての性格を強く持つている。即ち如来を難波から信濃に運んだという伝承は、笈に仏像を入れて各地を遊行した勧進聖の姿であり、又祖靈のシンボルたる不断燈明を管理したのは、東大寺二月堂の稻垣氏或は浅草寺の譜代衆と同様、古代に「火治り」といわれた祖靈祭の司祭者の職能を受けついだ者である。従つて善光寺の創立者は、この地方の氏族（若麻績又は本田氏）を壇越とした無名の古代的聖であつたと考えられる。

以上簡単に善光寺縁起について述べたが、その成立は奈良時代までさかのぼる事が出来、善光寺信仰の発展に伴つて体裁を整え、鎌倉時代に至つて完備されたと考えられる。又縁起の内容は単なる仏教的物語でなく、我国固有の宗教觀念の上に成立し、その中には善光寺史を開明する上で重要な手がかりを多くふくんでいる。注略